

高大接続研究の今日的課題と

カナダ・オンタリオ州の高大接続システム

山村滋（大学入試センター）、佐藤智美（東洋英和女学院大学）

大学ユニバーサル段階・大学全入時代を迎えた今日、大学入試に代わるような高大接続のシステムが必要とされている。そして、このことに資するような高大接続システムの研究が求められているのである。本稿では、このように高大接続研究の課題を捉え、高校成績に基づく大学入学者選抜制度の典型的事例の一つとしてのカナダ・オンタリオ州の大学入学者選抜制度の特徴を明らかにした。

1 高大接続研究の今日的課題

1.1 試験接続と教育接続

わが国の大学短大進学率は、2005年度には51.5%に達し、いわゆる大学ユニバーサル段階に到達している。また、大学短大志願者と入学者は2011年度にはそれぞれ737,000人、681,000人であり、全入に近い状況にある。このことは、高大接続にとって何を意味しているのだろうか。

荒井によれば、学校システムの量的構造の変化（ピラミッド型から台形型への変化）により、かつては入学試験による接続関係をつけることができたが、もはや、入学試験によって高校と大学の接続関係をつけることは不可能になっている¹⁾。高校進学も大学進学も競争が激しく、同一年齢集団の限られた者しか大学に進学できなかった時代には、入学試験に合格することが、大学の教育の準備ができていたことの保障ともなっていたのである。ところが今日では、進学率の上昇に加えて、「大学全入時代」という点からも、大学志願者のインセンティブとして入学試験は機能し得なくなっているのである。つまり、「試験接続」によって、大学入学者の学力水準は一定程度保障されてきたが、大学生の学力低下問題に代表されるように、もはや入学試験は学力水準の保障装置としても十分には機能していない。したがって、入学試験といういわば

「試験接続」方式に代わる接続方式を創り上げることが、ユニバーサル段階を迎えたわが国では喫緊の課題となっているのである。それでは、「試験接続」に代わる接続方式とは何か。筆者の一人（山村）が参加した「試験研究会」ではそれを「教育接続」と名付け「従来の選抜（入試選抜）に代わる新しい接続形態」²⁾のあり方を模索してきた。

1.2 欧州型の接続方法

「試験研究会」のメンバーの一人、藤井は、フランスにおける接続問題の分析において、ヨーロッパ型の大学入学者選抜制度から学ぶべき点は、大学入学資格試験が同時に中等教育修了資格試験を兼ねている点にこそあると論じている。「合格者がどの大学でも自由に入れるということよりも、それ（大学入学資格試験のこと：筆者註）が高校教育の学習の達成度を測る全国共通の試験であり、その合格をもって高等教育を受けるに十分だとの判断を下している点にこそ注目すべきなのである」³⁾と。このような制度の典型としてわれわれの頭にすぐに浮かぶのはフランスのバカロレア（Baccalauréate）とドイツのアビトゥーア（Abitur）であろう。この両国の制度はいわば、「教育接続」によって高校と大学の接続を、学力保障も含めて、基本的にはスムーズに実現している事例といえよう。

なお、藤井の論文も収録されている「試験研究会」の研究成果である『高校と大学の接続』においては、前述の「教育接続」の概念について明確に規定されていない。しかし、藤井の論に照らすならば、「教育接続」とは「大学での勉学を始めるにあたり、獲得した学力の内容および水準において十分であり、高校卒業時まで、そのための教育が提供されること」ということになる。

1.3 新たな分析視角とカナダへの着目

わが国の接続問題への示唆を得る方法として、「比較」という方法に着目するならば、フランス・ドイツ以外にも、「教育接続」を実現している国はないのか、そしてそのような国々から、フランスやドイツからとは異なる示唆が得られるのではないかと考えられるのである。ここで筆者等が視点として仮説的に注目したいのは、中等教育の歴史的発展段階とその位置づけという視点である。

各国の初等・中等教育の歴史的発展との関わりから見れば、中等教育と高等教育の接続に関する制度的設計は、当然のことながら、一様ではないと考えられる。たとえばドイツやフランス、イギリスなど、中等教育がもともと高等教育への「予備課程」として中産階級のためのものとして位置づけられてきた。一方、初等教育は、一般大衆の子どもを対象として、中等教育との接続が位置づけられてこなかった。これらの国、とりわけ、ドイツやフランスでは、中等学校卒業（資格）が大学入学資格として位置づけられていた。したがって、こういった中等教育が限られた者を対象としている限り、基本的に「高大接続問題」は、制度設計の観点からは、存在していなかった。それゆえ、今日、後期中等教育および高等教育の進学率の上昇とともに、従来のアビトゥーア（ドイツ）やバカロレア（フランス）といった、中等学校卒業（修了）資格試験＝大学入学資格試験という古い制度設

計思想に基づく試験を、いかに現状に改変するか、が課題となっているのである。

ここで、筆者等が注目したいのは、このような中等教育が中産階級のためのものとして位置づけられてきたような歴史的伝統が相対的には弱く、基本的には、単線型の初等・中等教育をとる国々での、よりスムーズな高大接続の制度設計の可能性である。ここではそのような国としてカナダに着目したい。

カナダでは、州ごとに学年制等の相違はあるものの、初等・中等教育は単線型をとっている。ドイツのような中等学校段階での分岐型のシステムはとっていないのである。しかも高等教育就学率はかなり高い。「カレッジ、専門学校または総合大学の教育を受けた成人の割合(53%)が高く、米国、イギリス、フランスを含む他の経済協力開発機構(OECD)加盟国の水準を超えてい」⁴⁾る。OECDによれば、2006年において25-34歳の年齢層のうち、カレッジ、専門学校または総合大学の教育を受けた者の割合は55%を占めていた⁵⁾。

さらに、国際的な学力調査においてもカナダは上位に位置している⁶⁾。このような国における中等教育と高等教育の接続システムを明らかにすることで、わが国の高大接続の改善に関して示唆が得られると考えられるのである。しかしながらカナダの大学入学者選抜制度に関する研究は、最近では、管見の限り筆者らのもののみである⁷⁾。そこで以下では、カナダでも特にオンタリオ州の大学入学者選抜制度に焦点をあてて、高校と大学の接続システムについて明らかにしたい。オンタリオ州に着目するのは、高等学校（中等学校）卒業試験制度がなく、中等学校の成績に基づいて大学入学者が選抜されるという点において、「入試」「試験制度」を媒介せずに高校と大学の接続を図るシステムとなっていると考えられるからである。なおオンタリオ州は、人口の上からは、カナダの人口（約3400万人：2010年）の約1/3の人口を擁するカナダ最大

の州である。

2 オンタリオ州の高大接続システム

2.1 オンタリオ州の大学入学者選抜制度

カナダでは、州ごとに大学入学者選抜制度は異なるが、ここでは、オンタリオ州の中等学校に通う生徒が、オンタリオ州の大学に志願する場合について述べることにする。

オンタリオ州における志願から入学までの一般的な流れは以下のものである。志願は、大学新年度の始まる前年の11月頃、つまり中等学校最終学年(12年生)の11月頃に受付が始まる。そして、翌年の1月中旬頃までが受付期間である。なお志願は各大学に直接するのではなく、オンタリオ州の大学への入学志願書进行处理することを主な機能とする機関であるOUAC(Ontario Universities' Application Centre: オンタリオ大学志願センター: 1971年設立)に申し込む。

志願にあたっては、オンタリオ中等教育修了証書(Ontario Secondary School Diploma, OSSD)⁹⁾を取得見込みであること(=中等学校を修了すること)、および、中等学校で提供されている科目のうち大学志願のために認められている科目である「大学準備科目」「大学・カレッジ準備科目」⁹⁾を6科目履修することが基本的要件である。

合否の決定は5月下旬頃までに各大学によってなされる。そして、合否は、主に最終学年における、大学進学のための科目として認定されており、かつ各大学の学部やプログラムごとに履修が要求される6科目の中間あるいは最終成績の平均点(パーセント表示)による。ただし、11学年の成績が考慮される場合もある。また、中間成績に基づいて下された合格は条件付き合格であり、最終成績が条件に合ったものであるかどうか、夏にチェックされる。条件付き合格とは、たとえば「英語」の最終成績が85%以上でなければならず、かつ6科目の平均が87%以上であること、とい

ったものである。オンタリオ州の中等学校は、通常6月下旬頃まで授業があるので、多くの志願者にとっては、5月下旬までに下されるのは、条件付き合格もしくは不合格だと考えられる。

科目の履修要件については、カナダでも有数の大学であるトロント大学(1827年設立)の場合、以下のようになっている。たとえば、トロント大学のセント・ジョージ・キャンパスにある文理科学部の「コンピュータ・サイエンス」プログラムを志望する場合、6つの「大学準備科目」または「大学・カレッジ準備科目」のなかに、「大学準備科目」の「英語」、「大学準備科目」の「ベクトルと微積分」を履修しておくことが必要である¹⁰⁾。また、同大学の人文・社会科学系のプログラムを希望する場合には、「英語」を含んだ6つの「大学準備コース」または「大学・カレッジ準備科目」の履修が必要であるが、中でも「経済」プログラムを希望する場合には、「大学準備科目」の「ベクトルと微積分」を履修しておく必要がある¹¹⁾。

なお、中等学校で提供される科目は、州の統一科目となっている。州が定めている各科目のシラバスには詳細な評価規準が設定されており、当該科目の成績評価は、州内で同じ規準に基づいて行われる仕組みとなっている。たとえば11年生(わが国の高校2年生に相当)で学ぶ「大学進学向けの数学」において、12の評価項目の下にさらに合計67のより詳細な評価項目が設定されている。また、知識・理解、思考、コミュニケーション、応用の4つのカテゴリーにおいて合計で11の評価規準(criteria)が決められ、それらの達成水準が文章にて4段階で示されている。また、各単元等では、パフォーマンスにもとづく評価方法が重視されている¹²⁾。こうした詳細な規準によって、学校間での成績評価の同等性・比較可能性を確保するようになっている。なお、成績評価が50%未満の場合には州統一カリ

キュラムで要求されている成績を修めていないことになり、当該科目の単位は認められない。また、中等学校成績の一部が中間成績によるものであり、大学から「条件付き合格」となっていた場合には、要求されている水準以上の成績を修めなければ、不合格となる¹³⁾。

2.2 オンタリオ州の高大接続システムの特徴

では、藤井の論から抽出した「教育接続」の定義に従えば、オンタリオ州の大学入学者選抜制度はどのように捉えられるであろうか。

まず、中等学校卒業生の学力水準については、OSSDにより一定の水準が保証されるしくみとなっている。しかし、卒業水準は、必ずしも大学での学びにとって必要な水準になっているとは限らないであろう。この点に関しては大学志願にあたっては、中等学校最終学年における「大学準備科目」もしくは「大学・カレッジ準備科目」の6科目にわたって単位を修得していなければならないという、より限定的な要求水準が設定されている。さらに、各大学は履修要求科目の設定によって、中等学校段階での特定の科目・教科領域に関して出願要件に縛りをかけることができる。また、「条件付き合格」を出すにあたって、志願者に上記6科目のそれぞれに関して一定の学力水準を要求することができる。ここには各大学が入学者に求める学力水準を設定できる仕組みが保証されているとみることができる。実際には大学も経営上、一定数の入学者を確保することが必要であろうから、条件を厳しくしすぎることはできないであろう。しかしながら高校で達成可能な水準と大学側で要求する水準を摺り合わせることで、高校での履修の上にスムーズに大学での学びに入っていけるような内容・水準を設定することは不可能ではないであろうし、大学側が高校に一方的に求める水準を定めることが出来るという道理は、大学ユニバーサル時代にあつては、成り立たないといつてよいであろう。

以上のように、オンタリオ州の選抜制度に、教育内容および水準的に、高校と大学を教育的に接続する仕組みの可能性を見ることができるのである。上述のように、わが国において教育接続の具体的あり方が求められているのであり、オンタリオ州のシステムは、その方向性の一つを示しているといえよう。

高校成績を基に選抜するシステムとすれば、これまで大学が入試にかけていた膨大なエネルギーと時間を、大学での教育や研究に費やすことができるようになるだろう。また、ペーパー・アンド・ペンシル・テストでは測定しにくい、思考力や表現力等の評価も加えることができるであろう（評価方法は、必ずしも共通である必要はない）。21世紀の知識基盤社会で重要になるのは思考力や表現力などの能力であり¹⁴⁾、それには高校内での評価システムがより適しているのである。したがって、わが国においても思考力や表現力といった能力についても選抜の視点として重視しようとするならば、高校成績に基づくシステムを目指すべきである。そこで、オンタリオ州のシステムは参考に値するといえよう。

なお、高校成績を大学入学者選抜に用いようとするならば、たとえばオンタリオ州のような共通的な詳細な規準は不可欠である¹⁵⁾。また、高校教員の評価能力を向上させることや負担の問題を考慮する必要があるだろう。さらに、オンタリオ州の事例に沿っていえば、高校（中等学校）成績の比較可能性・公平性が州の統一カリキュラム評価規準によって十分に確保されているのか、という問題があるであろう。管見の限り、高校成績の評価の同等性に関する調査研究はオンタリオ州では行われていない。筆者らがオンタリオ州教育省でこの点について質問したところ、現行のシステムで「確保されている」とのことであった¹⁶⁾。成績評価の公平性に関して、社会的に現状であり問題がないということなのであるが、この点に関しては、今後より詳細な分

析を加えていきたい¹⁷⁾。また、高校成績に基づいて入学者を決定するオンタリオ州のようなシステムにおいては、中等学校の各学年でどのような科目を履修するかが重要になってくる。進路指導や履修指導、科目選択の実態の分析も今後進めていきたい。

注

- 1) 荒井克弘(2000)。「高校教育と大学教育との接続」荒井克弘編『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部, 1-23 頁。
- 2) 荒井克弘(2005)。「入試選抜から教育接続へ」荒井克弘・橋本昭彦(編)、『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版会, 11 頁。
- 3) 藤井佐知子(2005)。「フランスにおける接続問題」荒井克弘・橋本昭彦(編)『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版会, 278 頁。
- 4) カナダ大使館広報部(n.d.)。『カナダと教育』カナダ大使館広報部。
- 5) OECD (2008). *Education at a Glance 2008: OECD Indicators*, OECD, table A1.3a。同統計によれば、アメリカ:39%, イギリス:37%, フランス:41%, 日本:54%, OECD 平均:33%であった。
- 6) たとえば、PISA2009 の結果は、読解力 6 位, 数学的リテラシー10 位, 科学的リテラシー8 位であった。
- 7) それらは以下のとおりである。

佐藤智美・山村滋(2006)。「接続研究の今日的課題とカナダの教育および大学入学システム」大学入試センター研究開発部『リサーチノート』RN-06-06, 1-18 頁。

佐藤智美・山村滋(2008)。「カナダ・オンタリオ州の教育および大学入学者選抜システム」大学入試センター研究開発部『リサーチノート』RN-06-10, 1-15 頁。

佐藤智美・山村滋(2008)。「カナダ・オンタ

リオ州の中等教育と大学進学」大学入試センター研究開発部『リサーチノート』RN-08-02, 1-46 頁。

なお、オンタリオ州の中等学校における生徒の進路選択, 中等学校と中等後教育・社会との接続に関する研究として, 以下のものがある。

佐藤智美・山村滋(2011)。「カナダ, オンタリオ州の中等学校にみる学校建設と生徒の進路選択—ピール教育委員会の2つの中等学校訪問から—」大学入試センター研究開発部『リサーチノート』RN-11-02, 1-33 頁。

また, 筆者らの論文以外で, カナダの大学入学者選抜制度に関する研究・報告として以下のものがある。

グレゴリー・マルコット(1996)。「オンタリオ州における中等教育と大学の新しい接続関係について—大学入試センターの役割—」大学入試センター編『21世紀に向けての大学入試—国際シンポジウム報告書—』大学入試センター, 116-122 頁。

小林順子(1986)。「カナダ—ケベック州の開放型大学入学制度—」中島直忠編『世界の大学入試』, 時事通信社, 479-503 頁。

倉元直樹・島田康行・鈴木規夫(2001)。「海外調査:アメリカ・カナダ」夏目達也(編)『高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究』(平成12年度中間報告書)(平成12~14年度日本学術振興会研究費補助金基盤研究(A)(1)), 22-43 頁。

8) OSSD を取得するためには, 9 学年から 12 学年の間に 18 単位は必修科目から 12 単位は選択科目から履修しなければならない(1 単位は, 110 時間の授業である)。また, 州の統一識字テスト(Ontario Secondary Literacy Test:10 学年で受験)に合格しなければならない(これは, 英語の基礎学力の徹底をはかるためである)。さらに, 40 時

間の地域参加活動が義務づけられている。詳しくは Ministry of Education, Ontario (2011). *Ontario Schools: Kindergarten to grade12: policy and program requirements 2011*, Ministry of Education, Ontario 参照。

9) オンタリオ州の 11 学年, 12 学年の科目は, 「大学準備科目(university preparation courses)」「大学・カレッジ準備科目(university/college preparation courses)」「カレッジ準備科目(college preparation courses)」「職業準備科目(workplace preparation courses)」「オープン科目(open courses)」の 5 種類がある。このうち大学志願のために認められるのは, 「大学準備科目」あるいは「大学・カレッジ準備科目」である (Ministry of Education and training, Ontario ((1999)). *Ontario Secondary Schools Grades 9 to 12: Program and diploma requirements 1999*, Ministry of Education and Training, Ontario)。

10) University of Toronto (2011). View Book 2012-13, University of Toronto, p. 50.

11) *Ibid.*

12) Ministry of Education, Ontario (2007). *The Ontario Curriculum Grades 11 and 12: Mathematics*, Ministry of Education, Ontario.

13) 参考までにオンタリオ州の大学における合格者の平均点を示せば, 表 1 のとおりである。

14) 川嶋太津夫(2012)。「大学入試のパラダイム転換を目指して」東北大学高等教育開発推進センター(編)『高等学校学習指導要領 VS 大学入試』東北大学出版会, 189 頁。

15) 同時に, 子どもの学力向上・学力保障のためのさまざまな施策が必要である。オンタリオ州の教育改革は, 平田によれば, 「直接的に子どもの学力に働きかけるような改革

(カリキュラムや学力テスト)だけでなく, 子どもの学力向上が可能となるような方向性でその他のさまざまな条件整備的改革(学級規模の縮小や教員研修の充実, 給与体系に関連させない形成的教員評価など)も同時に行っている」(平田淳((2007)). 「カナダ・オンタリオ州における子どもの学力向上政策—統一カリキュラムと学力テストに焦点を当てて—」大桃敏之・上杉孝實・井ノ口淳三・植田健男(編)『教育改革の国際比較』ミネルヴァ書房, 107 頁)といわれる。

16) 2010 年 11 月, オンタリオ州教育省への訪問調査による。

17) なお, 大学入学者の選抜に高校成績を用いる際の評価の公平性・同等性の確保に関しては, オーストラリアのクイーンズランド州が精緻なシステムを創りあげている。詳しくは山村滋(1996)。「オーストラリア・クイーンズランド州における大学入学者選抜制度—中等学校側の評価資料の利用システムに焦点を当てて—」大学入試センター『研究紀要』25, 41-58 頁, 参照。

表 1 オンタリオ州の各大学の合格者の平均点(2011 年)

	平均点
Brock Univeristy	80.3
Carlton University	80.9
University of Guelph	83.0
Lakehead University	79.5
Laurentian University	全体のデータなし
McMaster University	85.8
Nippissing University	79.8
OCAD University	全体のデータなし
University of Ontario Institute of Technology	78.1
Univertsity of Ottawa	82.1
Queen's University	88.5
Ryerson University	81.6
University of Toronto	84.0
Trent University	79.6
University of Waterloo	86.9
Western University (main campus)	87.1
Wilfrid Laurier University	81.7
University of Windsor	80.2
York University	81.4

出所 Common University Data Ontario (<http://www.cou.on.ca/statistics/cudo>)から各大学へのリンクより。